

『シャーロット・ブロンテの生涯』研究 (15)

フレデリカ・マクドナルド

芦澤久江

1. はじめに

ギヤスケル (Elizabeth Cleghorn Gaskell) の『シャーロット・ブロンテの生涯』(*The Life of Charlotte Brontë*, 1857) が出版されてから、さまざまな点において事実とは違うことが明らかになり、今日その研究はいまだに続いている。そのなかでも特にシャーロット (Charlotte Brontë) のブリュッセル時代については研究がほとんどなされていないように思われる。現代になってようやく、シャーロットとエミリー (Emily Brontë) のフランス語のエッセイがロノフによって編集されたばかりだが、これによりエジェ氏が彼女たちのエッセイをどのように修正し、どのような影響を与えたかがわかるようになった。特にエジェ氏がシャーロットのレトリックに大きく貢献していることを証明した (Lonoff xli-iv)。

しかし1910年代において、わたしがこれまで研究してきたところでは、ブリュッセル時代を取り上げ一冊の著書としてまとめたのはこのフレデリカ・マクドナルド (Frederika Macdonald) が最初である。フレデリカ・マクドナルドはエジェ夫妻を実際に知っており、それどころか彼らの学校で学んだ人物である。それゆえ彼女の証言はブリュッセル時代を扱う場合には必ず言及されている。そこで拙論ではフレデリカ・マクドナルドの『シャーロット・ブロンテの秘密』(*The Secret of Charlotte Brontë*, 1914) について考察してみたい。

2. シャーロットのブリュッセル滞在から帰国まで

マクドナルドがこの著書を出版した時代は、ブロンテ研究に未曾有の大変革を余儀なくされた時代であった。すなわち1913年7月、コンスタンタン・エジェの末裔によってシャーロットの四通の恋文がブリティッシュ・ライブラリーに寄贈され、7月29日にはマリオン・シュピールマン (Marion H. Spielmann) が「タイムズ紙」(*The Times*) に「シャーロット・ブロンテの失われた手紙」("The Lost Letters of Charlotte Brontë") と題して、その恋文を紹介した (9-11)。これはブロンテ研究史において最大の事件の一つであった。したがってこの年には、次のような一連の記事が書かれた。

無名氏が早速7月31日、『ブリティッシュ・ウィークリー』(*British Weekly*) で、手紙は穢れなきものであるけれども、エジェ氏に対するとっても情熱的な賞讃と愛着が表されていると述べ (43

3-34)、また同日別の無名氏が「ヨークシャー・イーヴニング・ポスト」(*Yorkshire Evening Post*)に「教授の恋愛物語」(“The Professor’s Love Story”)と題して、手紙の公表は彼らの関係についてわれわれの知識に実際何も付け加えてはならず、彼女の内的生命の強烈さを明らかにするのに役立つだけと主張した(5)。

ヘンリ・D・ダヴレイ(Henry D. Davray)は『メルキュール・ド・フランス』(*Mercure de France*)に、シャーロットの作品に関する意見を発表している。彼は、シャーロットの全作品は大なり小なり自伝的で、読者は個人としての彼女に関心をもつと述べ、恋文がどういう性質のものだったかという点に論点を絞り、シャーロットのエジェに対する愛は観念的な愛だったと結論づけている(673)。彼女の手紙は愛の叫びではなく、将来に対する不安、ハワースでの貧困と孤独に対する心配と、自分自身の学校を開きたいという希望を一つの悲劇的な訴えに溶かしていく叫びであり、シャーロットとエジェの間には何も隠すものがないということ、それが彼女の秘密だったのだと主張している(657-73)。

オーガスタス・リャリ(Augustus Ralli)はこの年9月『フォートナイトリー・レビュー』(*Fortnightly Review*)で、シャーロットの小説は希望の無さ、ヒポコンドリア、情熱的でロマンティックな性質、美に対する愛、病的性質を反映していると述べ、シャーロット・ブロンテの小説において一貫した動機を形作っているのは、彼女の生活の不調和であると判断し、『ヴィレット』において先行作品の構造的欠陥が最小限に抑制されているとしている(524-38)。

またマクドナルド自身が「シャーロット・ブロンテの教授」と題して『コーンヒル・マガジン』(*Cornhill Magazine*)のなかで、コンスタンタン・エジェが「独創的で感銘を与える教師」であり、彼を描いた『ヴィレット』(*Villette*, 1853)のポール・エマニュエルは「とても生き生きとした忠実な肖像」だと述べている(519-32)。

シャーロットの恋文が公表されたショックのなかで、イギリスの読書人たちは、それでもシャーロットは、徳の高い、親孝行の、貞節な女性だったとする意見を固守しようとしていた。当時の読書界において彼女は依然としてギャスケルが描いた聖女、有徳の孝行娘であったのである。

恋文の公表というショックを受けた人々は、シャーロットのベルギー留学と、エジェ夫妻に対する新たな視線で、作家シャーロットとブリュッセル小説群に一層の関心を寄せて行った。

この時代はブロンテ研究においても心理学的アプローチが始まった頃である。しかし心理学的研究と言っても、まだ初歩の段階で、シャーロットの深層心理の奥深くに迫っているとは言えない。

またこの時代は、フロイト(Sigmund Freud, 1856-1939)やユング(Carl Gustav Jung, 1875-1961)の深層心理学が起こり、精神分析的手法が文芸批評にも取り入れられ、一層の深化をみせるようになるが、初期の研究が「心理学的」という語を用いるのは、まだ新しいものの好きの好奇心が上滑りをしている嫌いがあり、真実の「心理学的研究」にまで深まっていなかったことにも考慮しなければならないであろう。ブロンテ研究において心理学的分析が本格的になるのは20世紀も後半になってからであろう。

心理学的研究についてマクドナルドは否定しないと言いながらも、そうした研究方法には納得が

いかなかったと思われる (3)。マクドナルドがなぜ心理学的分析に反対しているのかという理由は、彼らが事実を知らないまま心理学を使って解釈しようとしているからである (3-4)。

ギaskellがシャーロットの生涯を伝記として描き、シャーロットの青春時代、家庭教師としての経験、作家としての成功など知られていない伝記的事実が明らかとなり、シャーロットはイギリスだけでなくヨーロッパでも有名になり、偉人となった (Macdonald 3)。

ギaskellの作品は事実を語っているのかどうか検証されてきたが、ある出来事については研究が不十分だとマクドナルドは主張する (4)。ギaskellはシャーロットのブリュッセル時代 (1842年2月～1844年1月) について事実を無視して描いているので、描き方が不十分である (4)。ギaskellはブリュッセル時代を過小評価し、シャーロットの異国での苦しい経験やエジェ夫妻との関係を蔑ろにしているとマクドナルドは強く訴えているのである (7)。ギaskellの伝記では、エジェ氏は文学的な側面でシャーロットに非常に深い影響を与えた優れた先生であり、また、人格も穏やかで、シャーロットは彼に対して尊敬以外の気持ちを抱いていなかったように描かれている。しかしマクドナルドはギaskellが本当にこのように思っていたのか、きっと思っていなかったにちがいないと述べている (8)。

現代において、ギaskellの手紙などから、マクドナルドが述べているようにギaskellはシャーロットのエジェへの想いがただの尊敬の念だけではないことを知っていたとされている。ギaskellは伝記を書く際、実際にはるばるブリュッセルまで行き、エジェ氏に会いそこでシャーロットのラブレターを見たのではないかと推測される。かりに見ていなかったとしても、さまざまな資料を集めていくうちにギaskellはシャーロットのエジェ氏への気持ちを知ることになったであろう。事実、シャーロットの死後、『教授』(*The Professor*, 1857) が出版されるのを恐れていたのはギaskellに他ならなかった。なぜなら『教授』のなかにはシャーロットとエジェ氏との関係を読者に疑わせる部分があつたからである。すなわち『教授』が出版されて、二人の関係が暴露されるのではないかとギaskellは恐れていたのである。結局『教授』が出版されても、二人の関係が取り沙汰されることはなく、ギaskellは胸を撫でおろしたのだった。ギaskellはシャーロットのエジェへの想いを知っていたからこそ、それを隠そうとしてシャーロットとエジェ氏の関係は単なる師弟関係にすぎないと思わせるように描いたのである。マクドナルドが指摘しているように、ブリュッセル時代についての描写は確かに不十分であるかもしれない。しかしこのように、ギaskellにはブリュッセル時代をありのままに述べるできない事情があつたのである。

ギaskellはシャーロットのこうした秘密を守ることが義務だと感じていたかもしれないが、シャーロットはこの報われない愛に悩み、たった一人で戦い抜き、この人知れぬ思いを心の中に秘め、葬り去って、作品を書くことによって救済されたのだとマクドナルドは語っている (8-9)。結局ギaskellがシャーロットのもっとも重要な事実、すなわちエジェ氏に恋をしていたという事実を隠したために、シャーロットとエジェ夫妻との真の関係は明らかにされず、シャーロットの生涯が誤って伝えられることになった (10)。マクドナルドによれば、シャーロット、エジェ夫妻を正しく理解しなければ、『ヴィレット』(*Villette*, 1853) に描かれているルーシー・スノウ、ポール・エマ

ニュエル、マダム・ベックを理解できない。そのためマクドナルドは実際に彼女がエジェ夫妻のありのままを語るにより、真実を明らかにしたいと考えているのである。

マクドナルドは、シャーロットがブリュッセルに留学し、伯母の死によりハワースに帰国し、再びブリュッセルに戻った数か月間にシャーロットの周辺には何も起こらなかった、と見做している。ところが二度目の留学の1843年3月にシャーロットはエレンへの手紙のなかで、学校で孤独だと伝えている。ただしここではエジェ夫妻のことを悪くは言っていないものの、いつも彼らといっしょにいることはできないし、頻繁にさえもいられないとシャーロットの孤独な心境が述べられている。シャーロットがブリュッセルに戻った当初は、エジェ夫妻は親切にも居間を自分の居間だと思って使っていていいと言ってくれたが、かつて義兄弟であった音楽の先生が昼間から出入りするし、夜は夜でエジェ家のお邪魔になってはいけなないので、それはできないことだとシャーロットは語っている。マクドナルドはここまでは何の問題も起きていなかったが、5月29日になると、暗雲が垂れ込め始めると推察している。それはシャーロットがエミリに宛てた手紙から明らかである。シャーロットは次のように書いている。

Things wag on much as usual here. Only Mlle. Blanche and Mlle. Haussé are at present on a system of war without quarter. They hate each other like two cats.... I find also that Mlle Sophie dislikes Mlle Blanche extremely. She says she is heartless, insincere and vindictive, which epithets, I assure you, are richly deserved. Also I find she is the regular spy of Mme Heger, to whom she reports everything.... Of late days, M. and Madame Heger rarely speak to me...I am convinced she does not like me—why, I can't tell... (Smith 1:319-20)

マクドナルドが指摘しているように、この手紙からシャーロットの周辺で変化が起きていたのは間違いない。シャーロットはマドモワゼル・ブランシュが「エジェ夫人のスパイであり」、「エジェ夫人がわたしのことを嫌っている」と述べている。エジェ夫人がなぜ自分を嫌いなのか理由はよくわからないが、ただエジェ夫人はなぜシャーロットがブランシュ、ソフィー、オウゼと仲良くしないのか理解できないようであるとシャーロットはエミリに伝えている。またこの手紙にはエジェ氏についても述べられている。

He has already given me a brief lecture on universal bienveillance, and perceiving that I don't improve in consequence, I fancy he has taken to considering me as a person to be let alone...and I get on from day to day, in a Robinson Crusoe like condition,—very lonely.... Except for the loss of M. Heger's goodwill (if I have lost it) I care for none of 'em. (Smith 1:320)

マクドナルドは、エジェ塾でシャーロットを気遣ってくれる者はなく、エジェ氏の温情を失うことだけがシャーロットにとって悲しむべきこととなっており、ブリュッセルへ戻って数か月でシャーロットを取り巻く環境は変化したと指摘している (54)。確かにマクドナルドが述べているように、驚くほどシャーロットに対するエジェ夫妻の態度が変わったことは明らかである。それではここで一体何が起きていたのであろうか。シャーロットのエジェ氏への気持ちが尊敬から愛情に変化したことをエジェ夫人が悟ったからである。しかしマクドナルドは、これは決してエジェ夫人が嫉妬したことを意味しているのではないと断言している (57)。

マクドナルドによれば、エジェ夫人は容姿の点でシャーロットよりも魅力的であり、夫から絶大な愛情を受けていたので、エジェ夫人が嫉妬するはずはなかったというのである。それよりも評判の良い学校を運営していくのに、シャーロットのエジェ氏への想いはたいへん都合の悪いものだった (57)。こうしたことが少しでも噂になり、エジェ塾の評判が台無しになってしまうことを恐れたエジェ夫人が、最良の道として選択した方法がシャーロットを避けることだったとマクドナルドは解釈している (58)。

確かにこのマクドナルドの見解は一理あるかもしれない。これまではエジェ夫人がシャーロットに嫉妬して、シャーロットに冷たい態度をとったと考えられており、学校の評判を守るためエジェ夫人がシャーロットを遠ざけたのだという見解を述べる者はいなかった。それはマクドナルドが何度も指摘しているように、私たちは『ヴィレット』のマダム・ベックそのものがエジェ夫人だと思い込んでいるからであろう。しかしエジェ夫人にまったく嫉妬心がなかったのであろうか。マクドナルドが指摘するように、シャーロットを遠ざけたのは、エジェ塾の評判を守るためという心がけもエジェ夫人のなかにあったであろうが、嫉妬心がまったくなかったわけではないように思われる。ただマクドナルドが述べているように、マダム・ベックがエジェ夫人であると思いつくことにより、真実から遠ざかっているということをわたしたちは再認識すべきである。

シャーロット自身もエジェ夫人が自分を不都合な存在だと考えていたことを察知し、結局ハワースに帰ることとなった。帰国させることはエジェ夫人の目的であった。マクドナルドは、『ヴィレット』や『教授』に描かれているような嫉妬も悪意もエジェ夫人にはなかったが、シャーロットのエジェ夫人に対する個人的見解はひどいものだったと述べている (62)。結局エジェ夫人との確執をシャーロットは忘れられず、エジェ夫人を『ヴィレット』ではマダム・ベックとして、『教授』ではマドモワゼル・ゾライード・ルテールとして徹底的に描くことになったのである。

マクドナルドは、もしエジェ夫人の立場に自分を置いたとすれば同じことをしたのではないか、またシャーロットのエジェ氏への想いもわからないわけではなく、それぞれの視点から見ればどちらが悪いとは非難できないと述べている (66-7)。

『ヴィレット』でルーシーがポールと別れる場面は、シャーロットがブリュッセルを発つ前の数日間に起こったことであり、想像で書かれたことではないとマクドナルドは考えている (78)。たとえばポールは生徒たちに別れを言うために教室に行くが、シャーロットにもそのようなことが許されたにちがいない。そしてシャーロットは生徒たちに別れを告げるが、そこにはエジェ氏はいな

かっただろうとマクドナルドは推測している (80)。またエジェ先生の授業を受ける最後の機会もあったであろう。しかしマダム・ベックのように、エジェ夫人は手紙の書き取りをさせるためシャーロットを呼び出し、エジェ氏の最後の授業も受けさせなかったとマクドナルドは推測している (80-1)。しかしエジェ氏はシャーロットが帰ってしまう前に話をする機会を作ったのではないか。なぜなら、エジェ氏がシャーロットを好きだからというのではなく、生徒を大事にするという気もちから、そのように考えたのではないかとマクドナルドは想像する。最終的にはマダム・ベックがしたように、エジェ夫人の妨害により、シャーロットとエジェ氏の最後の別れは叶わなかったとマクドナルドは結論づけている (82-3)。これまで述べたことは、マクドナルドが『ヴィレット』のルーシーとポールとの別れの場면을想像したにすぎないので、ほんとうにそのようなことがあったかどうかは明らかではない。

マクドナルドはさらに、ルーシーの言葉は想像上の言葉ではなく、シャーロット自身の本音でもあるという (94)。マクドナルドは批評家ハンフリー・ウォードの意見を引き合いに出して、次のように述べている (94)。

In this masterpiece, Mrs. Humphry Ward finds one notable flaw:— it is this very passage— which the critic affirms (and no doubt she is quite right) does not strike her as a convincing nor even as credible account of the sentiments or behavior that could have belonged to Lucy Snowe, the heroine in *Villette*, ‘Lucy Snowe,’ this critic complains, ‘could never have broken down, never have appealed for mercy, never have cried “ *My heart will break,*” before her treacherous rival Madame Beck in Paul Emanuel’s presence!’ (94)

ハンフリー・ウォードは『ヴィレット』をシャーロットの傑作として評価しているが、その一方でルーシーの欠点も指摘している。というのはルーシーのものとは思えない不自然な感情や振る舞いがあるからだというのである (Macdonald 94)。しかし不自然かもしれないが、これはシャーロットに起きたことであり、そのときの感情を描いたものとマクドナルドは主張している (97)。

マクドナルドのこの見解は正しいように思われる。シャーロットは主人公に感情移入をすると、しばしば主人公と一体化し、感情移入をしすぎてしまう傾向にある。したがって冷静で客観的なルーシーにシャーロットが感情移入をし、自分に起こったブリュッセルでの経験からエジェ夫人への憎しみが込みあげて、ルーシーに「私の心は壊れてしまう」と言わせることになったのであろう。これはルーシーの叫びではなく、まさにシャーロットの叫びだったにちがいないのである。

3. 実際のエジェ夫妻

マクドナルドは、シャーロットにとっては『ヴィレット』が彼女自身の救済となったが、実在の

人物を描いたことで過ちを犯しているのではないかとシャーロットを批判している (148-49)。特にエジェ夫人への偏見については問題である (Macdonald 149)。マクドナルドはエジェ夫妻を擁護する立場にあるので、こうした発言につながっているのであろう。さらにこうしたシャーロットの過ちを追及してない批評家についてもマクドナルドは批判している (149)。したがってマクドナルドは『ヴィレット』の登場人物と実際のエジェ夫妻がまったく同じものではないという認識のもと、類似している部分と相違している部分について明らかにしたいと述べている (153-54)。

マクドナルドはシャーロットの同級生でこそなかったけれども、エジェ塾に入塾し、エジェ夫妻に触れたことのある人物である。ここでマクドナルドがエジェ塾に入塾した経緯を述べておこう。マクドナルドの母親のいとこはオランダ人と結婚していたが、その娘がエジェ塾で学んでいたのだ。そうした繋がりを通してマクドナルドの母親はエジェ塾での教育の素晴らしさを知り、自分の娘であるフレデリカをエジェ塾に入塾させる決意をした (168-89)。さらにマクドナルドの兄はエジェ夫人の推薦により、歴史を教えることになった (170)。マクドナルドはエジェ塾で教育を受けたその親戚の娘からエジェ氏の人格について予め聞いたところ、エジェ氏は嫌いになると、その人に対しては非常に不愉快な態度をとると忠告してくれた。また兄にも助言を求めたところ、「彼を怒らせないように、怖がっている様子を見せず目立たないようにしなさい」とマクドナルドは言われたのだった (170-71)。こうした忠告を胸にマクドナルドは母親とともにエジェ氏に面会したのである。

マクドナルドの母親のエジェ氏に対する印象はごく普通の人というものだった (171)。母親はフランス語が得意でもないのかかわらず、エジェ氏にフランス語で自分の娘をほめそやした。母親は自分の娘があまり健康を気にせず、読書や勉強ばかりしていると表現したかったにもかかわらず、彼女が実際言っていたことは幼い子どもの割には適切でない不健康なものを読んでいる。だからこの学校に入れ、しっかり勉強する癖をつけさせたいという趣旨のものになっていた。こうしたことはエジェ氏をいらいらさせるものであった (Macdonald 179)。そして突然エジェ氏がマクドナルドに向かって「わたしは寛大すぎますか。それとも厳しすぎますか」と聞いたとき「寛大です」と笑顔で言えばよかったが、マクドナルドは「どちらでもありません、先生。以上です。」(‘Ni l’un ni l’autre, Monsieur; soyez juste, celà suffit’) とフランス語で答えてしまい、するとエジェ氏の顔から笑顔が消えてしまった (181-82)。結局マクドナルドはエジェ氏に嫌われることになったのである。

マクドナルドが在籍していたのは1859年から1861年にかけてであり、そのときエジェ氏は50歳を過ぎ、文学の教師としては経験豊富で教え方も優れていた。マクドナルドの印象では愛想がいいどころか、恐ろしかったという (160)。とは言っても、マクドナルドによればただ恐ろしい、嫌われ者ということではなく、エジェ氏には二つの側面があり、尊敬すべき文学の先生という印象と、いつもいらいらしているという印象とがあったようである (161)。

マクドナルドは実際のエジェはシャーロットが友人エレン宛に書いた手紙そのものによく表現されているという (162)。

He is Professor of rhetoric a man of power as to mind, but very choleric & irritable in temperament—a little black ugly being with ‘a face’ that varies in expression, sometimes he borrows the lineaments of an insane Tom-cat: sometimes those of a delirious Hyena—occasionally—but very seldom he discards these perilous attractions and assumes an air not above a hundred degrees removed from what you would call from mild and gentleman-like. (Smith 1:284)

シャーロットがこれを書いたのは1842年であるが、エジェ氏はマクドナルドが会った1861年もまったく変わりなく、まさにシャーロットの手紙に描かれているような人物であったようである。

エジェ氏の容姿は、マクドナルドが会ったときには痩せてはおらず、やや太りぎみの傾向にあり、髪はヴェルベットのような黒ではなく白髪が混じり、頭の中心には毛がなかった。彼は年をとっているようには見えなかったが、額はブロンズで皺は寄っていなかった。眼は澄んで、鋭く、シャーロットが言うようにすみれ色で、鼻は鷲鼻で、マクドナルドの母親に言わせればベルギー人にしては整った鼻をしており、顎は湾曲していた (Macdonald 184)。エジェ氏は美男子ではなかったが、知的で、ユーモア、そして少しは優しさも兼ね備えていたが、ばかげたことにはいらいらし、愛情に欠けていた (Macdonald 185-86)。

エジェ氏はマクドナルドの国籍であるイギリスに対しても偏見をもち、マクドナルドの鈍いところに我慢がならないようであった (161)。またエジェ氏は叱っても泣かないと言う点でマクドナルドを嫌っていたとマクドナルド自身は言っている (188)。ベルギー人の少女たちは些細なことでも叱られるとすぐに泣き、泣くとエジェ氏は優しくなるが、泣かないと不愉快になっていたのである (188)。さらにマクドナルドはルソーの教えのもと、生まれつき人間は自由であり、魂は自分自身ののだという信念を持っていた。一方エジェ氏はこうした個人主義には反対であり、個人の権限、自由というものにも反対だった。エジェ氏は文学においては古典主義、宗教はカトリック、政治は反民主主義で、王を愛し、彼自身が王でもあった。このように授業においてエジェとマクドナルドは教師と生徒として何の問題もない理想的な関係だったが、個人的にはまったく考えも相性も合っていなかった (Macdonald 190)、エジェ氏に賞賛、感謝、喜びの気持ちをもってはいたが、そこには決して愛はなかったと振り返っている (190)。

マクドナルドがエジェ氏に二回目会ったのは『ヴィレット』にも描かれている禁断の小道だった。ここはシャーロットの時代には入ることを禁じられていたが、マクドナルドの時代には解禁となっていた。ただしこの場所で騒いではいけないだったので、本を読むには最適の場所だった。マクドナルドがそこで本を読んでいると、ブドウの木を切っている男性を見つけた。最初それは庭師だと思っていたが、何とそれはエジェ氏であった。『ヴィレット』にはポールがブドウの木を剪定する場面があるので、『ヴィレット』を読んでいたら、庭師ではなくエジェ氏だと予想がついたはずだが、マクドナルドはそれを読んだことがなかった。マクドナルドが詩の暗唱に夢中になっていたとき、気づくとエジェ氏がいた。マクドナルドはこのときフランス語が十分ではないため、エジェ

氏の授業を受けることが許されていなかった。エジェ氏はそのとき親しげで好意的だったのでマクドナルドは安心した (207)。そしてエジェ氏に愛犬ペッパーを洗う手伝いをするよう言われ、エジェの書斎に連れられて行った。屋敷はきれいに整っていたが、彼の書斎はたばこの煙が立ち込め、においも染みついていた。しかし床から天井まである本棚は圧巻であった。ここでマクドナルドはエジェ氏から一冊の本グザヴィエ・ド・メーストール (Xavier de Maistre) の『わたしの部屋を巡る旅』 (*Le Voyage autour de ma Chambre*, 1794) について知らされる。この本はマクドナルドの思想や考え方に影響を与え、この本がきっかけでマクドナルドのちに東洋哲学や仏教にも興味を抱くようになった貴重なものである (Macdonald 209)。マクドナルドは友人から教わった合理的であることの有用性をエジェ氏に話したが、エジェ氏はまったく意に介さなかったようで、彼は女性の場合は哲学よりも宗教を勉強するよう勧めた。エジェ氏は18世紀の女性の生涯を引用し、それをマクドナルドに暗記するよう言ったのである (210-11)。のちにこれはゴンクール兄弟のものであるとわかった。

エジェ氏はすでに述べたように、文学の先生であったが、ほかの点でも優れた教師であった。マクドナルドはやがてエジェ氏の授業を受けられるほどレベルが上がったが、算数は全くの苦手であった。エジェ氏はそのことがわかると、マクドナルドに何とか算数を理解させようと骨を折ったが、結局マクドナルドの算数についてはエジェ氏をもってしても何の成果も挙げられなかったのである。

無理に算数を勉強させられたことが逆効果となって、マクドナルドはエジェ氏のことを嫌うようになってしまったようである。そのためマクドナルドのエジェ氏への印象はあまり良くないものになってしまった。

それではエジェ夫人はどうであったであろうか。この点についていえば、エジェ夫人についてシャーロットはあまりにも不公平な描き方をしてしまうとマクドナルドは強調する (164)。マクドナルドの主張によれば、『ヴィレット』に描かれているマダム・ベックとエジェ夫人はまったく正反対である。

マクドナルドはエジェ夫人を次のように述べている。

The qualities I saw in Madame Heger were serene sweetness, a kindness without preferences, covering her little world of pupils and teachers with a watchful care.

(190)

エジェ夫人はエジェ氏と違い、すべての生徒を愛する心優しい人であったとマクドナルドは証言する (190-91)。ただ、シャーロットが手紙で述べているように、エジェ夫人が誰かにスパイとしてみんなを見張るよう言いつけていたことは実際にあったかもしれないという (192)。シャーロットの時代にも本当にあったかどうかはわからないが、マクドナルド自身の経験では幾つか不思議なことがあったという。例えば休日の後、少女たちが休日の後、家から持ち帰ったお菓子や品の悪い本は学校で禁止され、知らぬ間になくなっていることがあったという (192)。それはエジェ夫人が

誰かに見張りをさせていたということかもしれない。それゆえシャーロットがブランシュはエジェ夫人のスパイで告げ口をしていると手紙 (Smith 1:319-20) で語ったことは真実だったということになるのである。もしエジェ夫人が、このようにスパイ行為をさせていたとしても、『ヴィレット』のマダム・ベックとは似てはいないとマクドナルドは弁護している (193)。

マクドナルドは手持ちのエジェ夫人の写真とマダム・ベックの描写を比較して、二人の容姿の違いを述べている。マクドナルドがエジェ夫人に会ったとき、彼女は60歳であった。マダム・ベックの「顔つきは険しい」とシャーロットが描写しているが、エジェ夫人には触れがたい清らかさがあり、決して険しい顔つきなどしていなかった (Macdonald 194-95)。またシャーロットはベルギー人の少女たちは軽蔑した眼差しを向けていたと語っているが、マクドナルドはそれを否定している。必ずしもみんなが同じではないが、一般的に彼女たちが馬鹿にしたような目つきでマクドナルドを見ることは決してなかったと主張するのである (196-97)。国籍や信条が違っていても、愛情をお互に感じることはあるし、実際マクドナルドはベルギー人の友人とずっと長い交流を続けている (198)。

マクドナルドはエジェ夫人とのエピソードで以下のような話を取り上げている。エジェ塾にいたことのある生徒がブリュッセルから歩いて行けるところの大邸宅に嫁ぎ、そこへ生徒たちが招かれたことがあった。マクドナルドも友人たちといっしょに招かれ、おしゃべりをしながらグースベリーの実を食べた思い出を語っている。シャーロットの時代にはまだ先生ではなかった若いゼリー先生が付き添いであった。するとそこへ召使がエジェ夫妻のメッセージを持って来た。食事には間に合うようエジェ夫妻も到着する予定だったが、まだ到着していなかった。そのメッセージには少女たちに決して庭になるフルーツに触ってはいけないと書かれていた。ところがマクドナルドたちはベリーを摘んだ後からそれを知ることになった。やがてエジェ夫妻がやって来て、ベリーの茂みが荒らしていることを知り、ゼリー先生が責任を問われ、彼女はメッセージを聞いたのが遅すぎて、ベリーをすでに摘んだ後であったと弁解した。そしてそのとき、ほかの少女たちは周りにおらず、いたのはマクドナルドと彼女の友人マリー・ハザードだけであった。先生はこの子たちが悪いのではなく、他の子どもたちが大半を摘んでしまったとエジェ先生に説明してくれたけれども、エジェ先生はみんなを集めてお説教をした。そして次のように言い放ったのである。

‘If any of you are guilty, you know it in your consciences: you know now what it remains for you to do. For me, I believe, and I love to believe, that the only pupil in this school capable of this unworthy conduct is a foreigner.’ (Macdonald 247)

しかし驚いたことに友人のマリーがエジェ氏に向かって「わたしはベルギー人です。でもわたしもグースベリーを食べました」(‘Je suis Belge; et moi aussi j’ai mangé des groseilles’) と答えたのである (Macdonald 247)。

そしてマリーはマクドナルドにこのように述べた。

English or Belgian, one is not capable of baseness, and one has not deserved any blame: that is what is serious: the rest signifies nothing. One must not to be a patriot to this extent. It is not reasonable. If even you had been in the wrong about those gooseberries, do you truly imagine to yourself that the honour of England would have been affected by it? (Macdonald 251)

この友人の言葉はあまりにも合理的でマクドナルドの心を揺り動かすものがあつたが、一方で、友情に愛国心を持ち出してきたことに彼女は納得がいかなかった。その午後すべてのことの顛末はエジェ氏にも説明され、不当な判断がマクドナルドにされたことをエジェ氏も理解していたが、彼からは何の謝罪もなかった (Macdonald 252)。マクドナルドは長い間食堂にいとそこへエジェ夫人がやって来て、マクドナルドに起きたことはかわいそうなことだったが、お祈りが終わっているにもかかわらず、このままここにいるのは良くないとエジェ夫人は諭して聞かせた。最初は反抗心を持っていたマクドナルドだが、不当だからといって怒りに任せて、友人さえも敵と見做して不幸になっていく、実際にそういう悲しい運命を辿って死んだ人もいたというエジェ夫人の話を聞いて、彼女の気持ちは変わった (Macdonald 259)。そのときエジェ夫人が言っていたのはシャーロットのことだとマクドナルドは確信した (261)。さらにマクドナルドは、エジェ夫人の話から彼女は決してマダム・ベックではないと断言している (261)。このエピソードでエジェ氏とエジェ夫人に対するマクドナルドの印象は正反対のものとなった。マクドナルドはこの事件によりエジェ氏を嫌い、エジェ夫人に一層敬意と愛情を持つことになったのである。

4. おわりに

マクドナルドはシャーロットと同時代ではないが、実際にエジェ塾に入塾し、そこで教育を受けた人物であるので、彼女のさまざまな思い出は貴重な記録である。これまで見てきたように、マクドナルドのエジェ氏の第一印象はひどいもので、それ以降も彼の印象は良くなることはなく、ますます悪くなっていったと思われる。エジェ夫人への配慮から、控えめな言い方でエジェ氏について感想を述べているが、ときには激しい怒りが読み取れる。グーズベリー的一件などから、マクドナルドは思い出すたびに怒りがこみ上げ、彼を許す気になれなかったようだ。エジェ氏についてはマクドナルドが多少脚色しているかもしれないが、まったくの嘘偽りとは思われない。もしエジェ氏が描かれているような人物だったとしたら、シャーロットがエジェ氏をあれほど恋い焦がれたことが可哀想に思われてくる。エジェ氏はシャーロットに文学のうえでは素晴らしい尊敬すべき先生ではあったであろうが、性格的にはとてもシャーロットが敬愛するのにふさわしい人物だったとは思えない。シャーロットはエジェ氏の虚像を愛していたのかもしれない。

エジェ氏とは違い、エジェ夫人へのマクドナルドの評価は終始高かった。エジェ夫人が作品のなかで悪者のマダム・ベックとされていることに我慢がならなかったのであろう。それゆえ彼女は、

エジェ夫人が決してマダム・ベックではないことを証明しようとした。この著書の目的はエジェ氏の不当な仕打ちを暴露することと、エジェ夫人を弁護することであったのかもしれない。マクドナルドは当初、論理的に話を展開しようとしているが、第二部の思い出を語る部分から、張りつめた緊張の糸が切れ、終始思い出話に酔ってしまうような筆致になってしまった。それゆえ証拠は十分とはいえ、エジェ夫妻がいかにマダム・ベックとポール・エマニュエルとは違うかを証明できていない。その点においてマクドナルドの著書は記録として貴重な参考書ではあるが、優れた研究書とは言い難いと言わざるを得ないのである。

引用文献

British Weekly. 31 July. 1913:433-34.

Davray, Henry D. "Le Secret de Charlotte Brontë." *Mercur de France*. September-October 1913:657-73.

Lonoff, Sue.ed. Introduction. *The Belgian Essays*. New Haven and London: Yale University Press, 1996.

Macdonald Frederika. "Charlotte Brontë's Professor." *Cornhill Magazine*. October 1913: 519-32.

——— The Secret of Charlotte Brontë. London: T.C. & E. C. Jack, 1914.

"The Professor's Love Story." *Yorkshire Evening Post*. 31 July 1913: 5.

Ralli, Augustus. "Charlotte Brontë." *Fortnightly Review*. September 1913:524-38.

Smith Margaret. ed. Vol I of *The letters of Charlotte Brontë*. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 2000.

Spielmann, Marion H. "The Lost Letters of Charlotte Brontë." *Times*. 29.July 1913: 9-11.